



第2回地域・まちづくり委員会を開催しました。

9月26日（金）に開催された2025年度第2回では、年間学習テーマの「居場所」について、公開学習会を開催し29名が参加しました。

講演：地域共生社会での居場所の役割

子ども食堂と私たちの地域・社会

講師：社会活動家、東京大学特任教授、日本福祉大学客員教授

認定NPO法人全国子ども食堂支援センター・むすびえ

公共政策アドバイザー 湯浅 誠さん



「居場所」とは？ 「居場所」を辞書で引くと「場所」「自分のいる場所」が第一義でできますが、私たちの活動では「居場所感のある場所」と言います。これは自分が「ここだ」と決めればどこでも「居場所」になりうるということで、重要なポイントは「本人が決める」ことで、施設概念ではありません。つまり「居場所をつくる」のは、多くの場合、居場所を必要とする当事者ではないため、語義矛盾が生じます。閣議決定した子どもの居場所づくり指針の中にも「居場所と居場所づくりには隔たりが生じる」という表現を取っています。そこで大人の役目は「誰かの居場所になってくれたらいいな」と思いながら場を作ることになります。

「居場所」の目的 居場所の提供はかつては居場所を失くした少数の人たち、例えば家族、親族との縁の切れてしまった人たちへの支援でした。しかしバブル崩壊以降、経済的困難、非正規雇用、少子高齢化、家族形態の変化や地域、地縁の疎遠化など「孤立」が問題とされ始め、その後に発生した東日本大震災で、つながりの求め方が大きく変化しました。2015年以降子ども食堂数が増加していることも世の中が孤独からつながりに問題意識が変化したことの一つの現れと言え、この状況はしばらく続くと考えられます。また、人口減少社会では「孤立」リスクがすべての人に対して高まることから特定のカテゴリ化された人（例ホームレスや認知症、引きこもりなど）だけに居場所の提供をしていけばいいということではなくなりました。孤独孤立は社会全体の問題として政府も捉えています。



「居場所」の役割 居場所の種類は大きく2つに分けられます。支援がベースの居場所は、は、主な対象が「同じ」課題を抱えた人と支援をする人のため、安心して過ごせるという利点や課題の解決に繋がりやすい利点がありますが、それ以外の人には来にくいという難点があります。一方で交流がベースの居場所は「違い」を受け入れる場所として多様な人とのつながりを目的とするため誰でも参加できますが、支援が必要としている人に、支援が届いているのか把握できません。居場所を開設する場合は対象を明確することが重要となります。また地域全体ではどちらの居場所も身近にあることが望ましいといえます。

「居場所」の重要性 現在運営されている子ども食堂の多くは、参加条件がないため、様々な人たちが気兼ねなく集まる場所となっています。多様な人との関われることから、子ども食堂の数と比例して子どもたちは「自己肯定感」や「社会性」が高まるということが裏付けられています。また、大人も自宅以外の居場所のある人の幸福感、満足度が高いこともわかっています。

まとめ 「よりたくさんの人によりたくさんの居場所（交流ベース）＝どこも」「どんな人にも少なくとも一つの居場所（支援ベース）＝どこか」この2つが両輪となる地域と社会が、目指すかたちだと思っています。

（文責 事務局）